

作家・森村誠一の証明展

～ごあいさつ～

“母さん、僕のあの麦わら帽子、どうしたでせうね”西条八十の叙情豊かな詩のフレーズが印象的な作品『人間の証明』は、小説作品のみならず映画化、ドラマ化され、大きな社会現象となりました。そして作家・森村誠一の名を、不動の地位に押し上げた作品ともなりました。

氏は昭和8年（1933）に熊谷町（現熊谷市）に生まれました。熊谷尋常高等小学校時代から様々なジャンルの本を読み耽り、文字通りの文学少年でした。そして作家となった氏の作品背景を決定づけた出来事は、12歳の時に体験した終戦前夜の「熊谷空襲」です。一面焼け野原となった街の風景を、氏は今でも鮮明に思い出すことができると言います。

熊谷商工高等学校を卒業し一年後、青山学院大学文学部英米文学科に入学、大学時代は登山にのめり込み、後年の趣味ともなったその経験が、日本推理作家協会賞を受賞した代表作『腐食の構造』など多くの推理小説の一場面を彩っています。

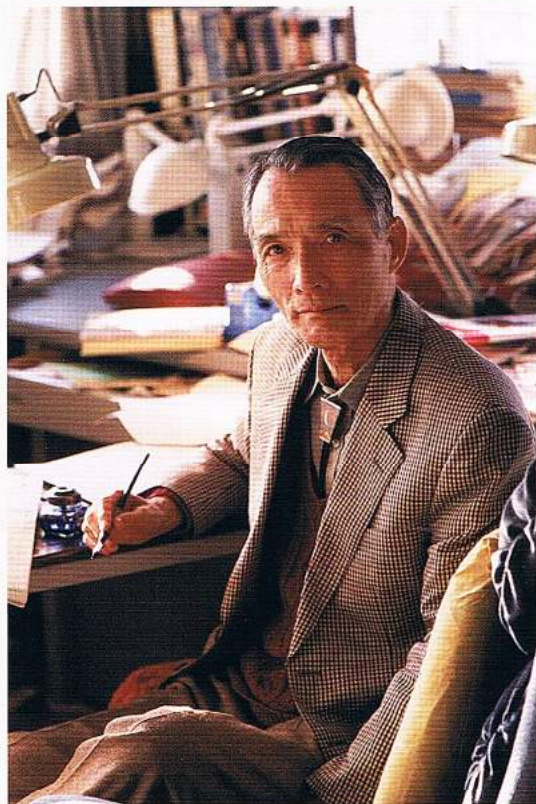
また氏のノンフィクション作品『悪魔の飽食』シリーズは戦争の悲惨さ、戦争という極限状態に置かれた人間のおろかさ世に知らしめ、現在まで氏が精力的に行っている反戦・平和運動の原点の一つとも言えるでしょう。

さらに『平家物語』や『忠臣蔵』『太平記』といった時代小説作品は、文学少年時代から読み耽った吉川英治の影響を受け、吉川英治文学賞を時代小説『悪道』で受賞したことは、氏にとっても感慨深い出来事であったと思われます。

そして近年は「写真俳句」を提唱し、何気ない日常を写真で記録、俳句で記憶し、日本の文化を生活の中に浸透させる試みも行っています。

このたび当館では、氏のお申し出を受けてオリジナルタイトル404作品1,523冊、氏が連載していた雑誌類や作品を制作する前の作品プロットを記した大学ノートなど、合計2,432点の作品・資料のご寄贈を受けました。今回展を、氏のこれまでの足跡を多くの方に知っていただく機会として、また氏の郷土熊谷への思いを感じていただく機会としていただければ幸いです。

最後に、“自分の子ども”ともいえる作品たちを当館にご寄贈いただきました森村誠一氏に深く感謝申し上げます、開催のごあいさつといたします。



森村誠一氏（タカオカ邦彦氏 撮影）

会期：平成30年4月1日（日）～6月24日（日）

〔休館日：毎週月曜日（祝日を除く）、4/6、5/1、5/11、6/1、6/26、6/27〕

会場：熊谷市立熊谷図書館 3階 郷土資料展示室

時間：午前9時～午後5時



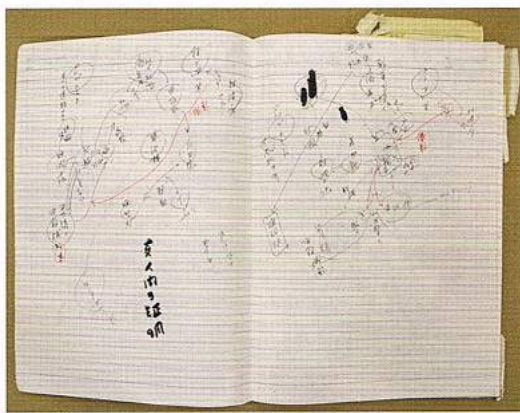
『高層の死角』 第15回 江戸川乱歩賞受賞



『腐蝕の構造』 第26回 日本推理作家協会賞受賞



『悪道』 第45回 吉川英治文学賞受賞



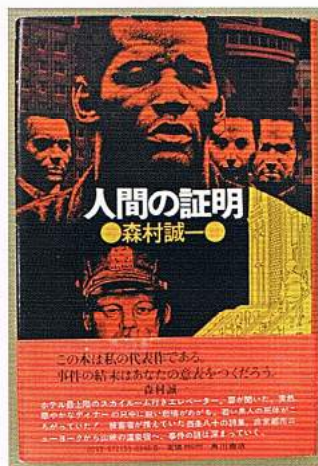
『人間の証明 21st Century』の作品プロット (人間関係図)



森村氏愛用のガラスペン



『写真俳句の愉しみ』



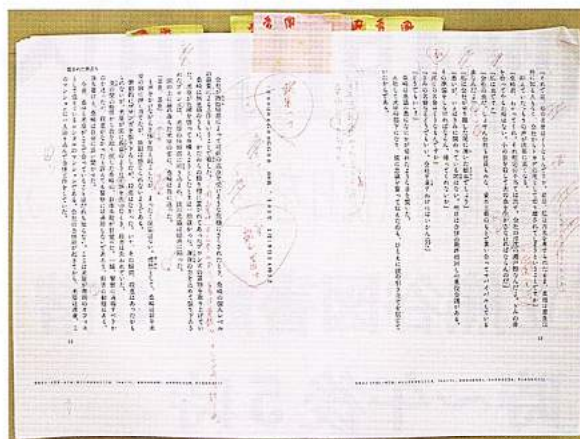
『人間の証明』初版本



『野性の条件』連載第1回 『野性時代』2003年12月号



『忠臣蔵』



『レッドライト』の校正原稿



『レッドライト』